

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：37102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770095

研究課題名(和文)五井蘭洲の和学とその受容

研究課題名(英文)The japanese classicism by Goi Ransyu and its influence

研究代表者

天野 聡一 (AMANO, Soichi)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：50596418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本課題研究が得た主な成果は以下2点に関するものである。1点目は五井蘭洲の和学である。蘭洲が著した『勢語通』は、伊勢物語が業平の自記に伊勢が追記したものとしており、この見解は初稿本から最終稿本まで一貫している。この立場は『闕疑抄』に基づき、『古意』とは鋭く対立するものである。2点目は蘭洲が加藤景範・上田秋成に与えた影響である。景範は蘭洲が著したと目される『続落久保物語』の後に位置づけられるべき『いつのよがたり』という作品を著しており、作中には蘭洲の思想が色濃く反映されている。一方、秋成は伊勢物語注釈において前述した蘭洲の立場とは異なる見解を示しているなど、一概に蘭洲の和学を吸収したとは言えない。

研究成果の概要(英文)：This research has revealed two things. The first point is about matters of classicism of Goi Ransyu. He thought that Ise-Monogatari was established by addition of Ise in the self-record of Narihira. This opinion is based on "Ketsugisyou". On the other hand, "Koi" is sharply opposed. The second point is the influence that Ransyu gave to Kato Kagenori and Ueda Akinari. Kagenori wrote a story called "Itsunoyogatari" This is positioned after Ransyu's "Zoku Ochikubo Monogatari", and thought of Ransyu is reflected strongly in the work. On the other hand, Akinari shows different views from the standpoint of Ransyu mentioned above in the "Ise-Monogatari" commentary, so it can not be said that Akinari has completely absorbed Ransyu's academics.

研究分野：日本近世文学

キーワード：懐徳堂 五井蘭洲 加藤景範 上田秋成 和文小説 擬古物語 伊勢物語 天皇観

1. 研究開始当初の背景

五井蘭洲(1697~1762)は近世中後期の大阪において活躍した学者である。現在、蘭洲についての最も一般的な理解は、懐徳堂の助教を務め、中井竹山(1730~1804)・履軒(1732~1817)兄弟を指導・育成した儒学者、というものである。しかし、蘭洲の活動はそうした“漢学”面にとどまらず、“和学”面にも及んでいる。例えば、『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』などの神話研究、『伊勢物語』『源氏物語』などの物語研究、あるいは『続落久保物語』(『落窪物語』の続編)のような物語創作がそれである。そして、こうした和学の成果が、蘭洲門弟で歌人の加藤景範(1720~1796)をはじめ、蘭洲を「五井先生」(『胆大小心録』)と呼ぶ上田秋成(1734~1809)等に受け継がれていることは、つとに中村幸彦「五井蘭洲の文学観」(1969)によって指摘されている。

蘭洲の和学とはどのようなものだったのか、そして、それは後代においてどのように受け継がれていったのか。かかる問いかけは、近世中後期における文学思潮を理解するための重要な問題設定と言えるだろう。

この問題に取り組むために、本研究では以下にあげる小テーマを設定した。

- 1: 五井蘭洲の和学
- 1 - A: 蘭洲の伊勢物語研究
- 1 - B: 蘭洲の日本書紀研究
- 2: 後代に与えた影響
- 2 - A: 加藤景範に与えた影響
- 2 - B: 上田秋成に与えた影響
- 3: 同時代の和文小説

2. 研究の目的

本研究の主要目的は、五井蘭洲の和学と、それが後代に与えた影響を分析することにより、近世中後期の上方面における文学思潮を明らかにすることである。

以下、先述した小テーマにそくして研究の目的を述べる。

1 - A: 蘭洲の伊勢物語研究

蘭洲は自身の伊勢物語研究の成果を『勢語通』という注釈書にまとめている。このテーマでは『勢語通』の分析を通して蘭洲の伊勢物語研究の特徴と意義を明らかにする。

1 - B: 蘭洲の日本書紀研究

蘭洲の神話研究は『日本書紀』『古事記』『先代旧事本紀』『古語拾遺』などについての講義書が今に伝わっている。このテーマではこれらのうち特に『日本書紀』関係の講義書の分析を通して、蘭洲の日本書紀研究の特徴と意義を明らかにする。

2 - A: 加藤景範に与えた影響

蘭洲は『続落久保物語』という和文小説を著していたと推定されるが、その蘭洲の和学を継承したと言われる門人・加藤景範もまた、『いつのよがたり』という和文小説を残している。このテーマでは『いつのよがたり』の内容を分析し、さらに蘭洲の物語創作との連続性を検証する。

2 - B: 上田秋成に与えた影響

『勢語通』が秋成の伊勢物語注釈書である『よしやあしや』に影響を与えていることは、中村幸彦によって簡潔に指摘されている。このテーマでは、1 - A研究の成果を用いることで、『勢語通』と『よしやあしや』の影響関係をさらに明らかにする。

また、1 - B研究の成果を用いて、秋成の神話研究(『神代がたり』など)との影響関係もあわせて分析し、これまで未解明だった神話研究における蘭洲からの影響関係について明らかにする。

3: 同時代の和文小説について

蘭洲作と目される『続落久保物語』や景範の『いつのよがたり』、さらに秋成の小説類を文学史上に位置づけるため、同時代の和文小説について調査分析を続ける。

3. 研究の方法

1 - A: 蘭洲の伊勢物語研究

『勢語通』を一段ずつ精読していく。その際、『闕疑抄』『勢語臆断』『勢語通(片桐本)』『勢語通(懐徳堂本)』『古意』『よしやあしや』を随時比較することで、伊勢物語注釈史上における蘭洲の位置づけ、『勢語通』の改稿過程、秋成の伊勢物語研究との関係を具体的に抽出する。

1 - B: 蘭洲の日本書紀研究

『蘭洲先生神代巻講義』上下巻を一段ずつ精読していく。その際、『神代がたり』との比較を行うことで、秋成の神話研究との影響関係も検討する。

2 - A: 加藤景範に与えた影響

『いつのよがたり』の内容を分析する。特に、作中にあらわれた天皇・朝廷に対する考え方に着目し、それらを抽出・整理した上で、蘭洲の著作を参看し、思想上の連続性を検証する。また、近年の近世朝廷研究の成果を学び、『いつのよがたり』という書物が、近世朝廷史といかなる接点を持つのかについて、明らかにする。

2 - B: 上田秋成に与えた影響

伊勢物語および神話研究における影響関係を分析する。その方法は1 - A、1 - Bで記したように、蘭洲の著作を細かく分析していく中で、随時秋成の著作と参照するというものである。

3：同時代の和文小説

各種目録類を参照し、和文小説と思われる作品を閲覧し、その作者、内容、成立について分析する。その上で、蘭洲や景範の和文小説が、和文小説史上、どのような位置を占めるのかを総体的見地から解明する。

4．研究成果

1 - A：蘭洲の伊勢物語研究

蘭洲によると、伊勢物語は業平の自記を基として、後に業平を知る伊勢が追記したものである。この見解は、片桐本と懐徳堂本で共通しており、蘭洲の中でも一貫したものであったようである。この蘭洲の立場は細川幽斎の『闕疑抄』に拠るもので、全篇を虚構と見なす賀茂真淵の『古意』とは鋭く対立している。

また、片桐本と懐徳堂本との比較の中で、興味深い事柄が分かった。それは引用される伊勢物語以外の書物の数が、片桐本から懐徳堂本へと増加していくということである。このことは蘭洲が片桐本から懐徳堂本へと至るなかで、多くの本を参照して自らの見識を深めていったことを証する。注目したいのは引用数が増加した書物が『源氏物語』『古今集』『万葉集』であったということである。これらは全て蘭洲がそれぞれ注釈書を著したものであった。すなわち、蘭洲の中で、伊勢物語研究と源氏・古今・万葉研究は密接に連動していたというわけである。

なお、蘭洲の和学書の流布について、源氏物語注釈書(『源語話』)にそくして分析した。『源語話』は後年何者かの手によって『源語梯』と改題・改変され、出版された書物である。『源語梯』の作者は不明であるが、『蘭洲遺稿』等の諸資料を調査した結果、『源語話』に限らず、『勢語通』や『万葉集話』といった蘭洲の古典注釈が本人の預かり知らぬところで流布していた事例が明らかになった。

1 - B：蘭洲の日本書紀研究

すでに陶徳民氏による指摘があるが、『蘭洲先生神代巻』には垂加神道との共通点が複数認められた。それは、「垂加翁云神書ヲ見ル先四化ヲ知ルベシ」として山崎闇斎の四化の説を紹介している点や、「梨木三位祐之八天御中主八造化ノ神也(中略)トイヘリ」として梨木祐之の説をあげていることから明らかである(梨木祐之は闇斎直門の一人)。

一方、講義書であるからか、身近な例を用いた分かりやすいたとえが多いことも特徴である(イザナギの黄泉国訪問において、生死の境がはっきりとしていないということ。「人ノ寝ルトキト起ルトキノヤウナルモノ也」とするなど)。

また、蛭児を船で流す場面について、蘭洲は「ワキテ愛アレトモ不祥ユヘ流シヤル」と愛児を手放さざるを得なかったイザナギ・イザナミの心境を思いはかり、「堅固ナル船二乗セテヤル八愛ノアマリアルユヘ也。順風モ

愛スルユヘ也。順風ヲ待テヤル也」とイザナギ・イザナミの行為を理解する。これは後述するように秋成にも通じるものである。こうした解釈が何に基づくののかについては今後の検討課題となる。

2 - A：加藤景範に与えた影響

『いつのよがたり』は理想の天皇像を描いた作品であった。その要点は以下の5点にまとめることができる。「孝」の重視、大学寮の再興とそれに伴う儒学者の登用、天皇号と漢風諡号の復活、御修法の変更、鳴物停止の変更である。

は言うまでもなく懐徳堂が最も重視した事柄であり、本作が懐徳堂の思想を濃厚に伝えるものであることを示している。は中井竹山の『建学私議』『草茅危言』との対応が見られ、大学寮への憧憬という点では『続落久保物語』との共通点も認められる。と同様の思想は、従来中井竹山の『草茅危言』がよく知られていたが、本作の内容は『草茅危言』とほぼ一致するものであり、しかも『草茅危言』よりも早い。近世期の天皇に関する思想として、最も注目に値する事柄だろう。

は朝廷と仏教との癒着を批判したものの。蘭洲の『承聖篇』との一致が確認され、蘭洲の仏教批判を継承しているということが明らかになった。は景範独自のもので、大坂における天皇・上皇の死に際しての忌みが、將軍のそれに比して軽んじられていることを批判したものである。

なお、この研究を通して、宝暦期における高辻家などの公家と懐徳堂との関係という新たな視点を得ることが出来た。

2 - B：上田秋成に与えた影響

秋成の伊勢物語研究は基本的に真淵の『古意』に基づくものであった。したがって、蘭洲の伊勢物語研究がただちに秋成に流れ込んだとは言えない。ただし、伊勢物語の中に業平の不遇と憤りを見出だすという姿勢は、蘭洲の伊勢物語理解の特徴と共通しており、なお無視できないものがある。

また、神話研究においても直接的な影響関係をただちに認めることはできなかった。しかし、イザナギ・イザナミの蛭児への愛情を認める姿勢(二神が「かくれの宮」へ行ったことに対し、秋成は「蛭子ヲ一回棄タマヘト、下ナケキシテユキタマヒケン」と想像している)や、忌部家の不遇と憤りに注目する姿勢は共通していた。失った愛児への哀惜の念、不遇と憤りというテーマは、秋成の複数の注釈書(『土佐日記』『伊勢物語』など)に認められるものでもある。今後さらに詳しく追及すべきテーマであると言えるだろう。

なお、本研究に関連して、秋成における小説創作と古典注釈の関係について、『雨月物語』の「吉備津の釜」にそくして分析を行った。作中の文辞の典拠を考証し、そこにどのような古典とのつながりがあるのかを確認

するといったものだが、特に、和歌や源氏物語を作中に摂取していることを確認できたことは、蘭洲の和学との関係を考える上でも意義深いものであった。

3：同時代の和文小説

研究期間内に分析を終えることができたのは、服部高保『てづくり物語』、村田春海「春の山ぶみ」、清水浜臣「虫めづる詞」、朝田由豆伎『袖のみかさ』の四作であった。いずれも江戸派の国学者による作品であり、彼らが幕末に至るまで和文小説を著していることが分かった。

特に、と はそれぞれの歌文集に収まる短い物語で、もとは和文の会の席上で披露されたものだったと考えられる。従来、和文小説として言及されることのなかった類の作品だが、未だ多くの作品群が分析されないまま存在している。今後の重要なテーマとなるだろう。

蘭洲や景範の和文小説と比すると、江戸派の和文小説はその依拠する古典作品に対する憧憬の念が顕著である。同じ和文小説ではあるが、執筆に際しての姿勢・理念はまた別種のものであったと言うべきだろう。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

著者、タイトル、掲載誌、巻号、ページ、刊行年月、査読の有無

天野聡一、「清水浜臣「虫めづる詞」考 もう一つの「虫めづる姫君」」、『鈴屋学会報』(鈴屋学会) 34、39-54、2017-12、査読有

天野聡一、「春の山ぶみ」考 嵯峨野の春の夢」、『國學院雑誌』(國學院大學総合企画部) 118(8)、23-38、2017-8、査読有

天野聡一、「『袖のみかさ』考 光格天皇の後宮の物語」、『日本文学』(日本文学協会) 66(6)、27-38、2017-6、査読有

天野聡一、「吉備津の釜」考 再会場面の磯良」、『国文論叢』(神戸大学文学部国語国文学会) 51、50-61、2016-9、査読有

天野聡一、「『源語梯』覚書」、『中野三敏先生傘寿記念文集 雅俗小径』(雅俗小径刊行会) 81-85、2015-12、査読無

天野聡一、「加藤景範『いつのよがたり』の天皇観 懐徳堂の思想との関連を中心に」、『国語と国文学』(東京大学国語国文学会) 92(8)、22-37、2015-8、査読有

〔学会発表〕(計 2 件)

天野聡一、「清水浜臣「虫めづる詞」について」、第34回 鈴屋学会大会研究発表会(於本居宣長記念館) 2017-4

天野聡一、「『袖のみかさ』について」、第66回 西日本国語国文学会(於鹿児島大学) 2016-9

〔図書〕(計 1 件)

天野聡一他『江戸の学問と文藝世界』(森話社) 173-194(担当箇所) 2018-2

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

日本文学 Internet Guide

<http://soamano.wixsite.com/nihonbungaku>

本研究を進めていくなかで見出だしたインターネット上の各種データベース類を整理し、簡略な説明文を付したリンク集である。

6．研究組織

(1) 研究代表者

天野 聡一 (AMANO, Soichi)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：50596418